

目的 わが国農村の近年の急速な変遷の中で、子育ての実態がどのように変つて行つたか、都、生活者およびわが国全体と比較し、農村の育児の特徴と方向を考察する。

方法 昭和44年より56年に亘る期間に、青森より佐賀に及ぶ//地域の農村の訪問による横断的調査

結果 施設内出産の割合は44年の新潟西川における44名から漸増の途をとつていたが、調査時期と共に地域差が大きくなり、一般に東型農村地域で後進傾向がみられた。

出産前後の農作業は、産前産後の休業をとる者の割合が次第に増加しているようであるが、今日なお妊娠10カ月まで農作業をする者がかなりみられ、産後は20%余が1カ月以上農作業を開始しており、今日なお労働はかなりきびしいと思われる。

育児の相談対象は全国調査の結果に比し、実母や姑など親族をとりよにする者が多くなつていたが、地域保健活動がきわめてよく浸透している地域もみられた。

初回授乳時母乳を与えた者の割合は低く、母乳の重要性の認識などはむしろ大都市等とより遅れているようであった。

子どものおむす歴は、大学まで行かせたいという希望は全国の大学進学率より下廻っており、教育熱は低いようであった。

わが国古来の年中行儀よりクリスマス・バースデーといった外来の、商業政策にあやつられた生活の楽しみ方がなされるようになって、農村は都市よりも画一的近代化の波にさらされているように思われる。